

附冠

錦

の囊

162

1013-

087731-000-3

特66-945

冠附錦の囊

和合散人撰

M26

DBF-0045





はーがき

三十一字の本哥は。陽春白雪なり。詠

諸笠附の類は。巴入下俚の調なるべ

一。宜かる哉。世に唱和多く。能く人の

心腹に入り易く。通じ易きとぞ。その

笠附てふもの。俗より雅に入り。舊

として新に換へ。言外に意味をもた

せ。意表に千言萬語の妙味を含む。と

ればにや。人情の穿ち粹道に通じ。人

情世態一も波らさず。或は青標紙の

故車と愛子。又は目前の情態を述べ

て。見るものごとく感嘆欣笑交なら

る。余偶其集句を一閱し。節を打て

曰。道此にありと。其尤も鄙近にして

切實なるを拾ひ。積て千餘句に至り。
 同好の數奇者に示して、以て茶話酒談の
 一助となしぬ。寶ふや。花に啼く鶯は
 法華を談じ。勸學院の雀は蒙末と轉
 るとかや。それハ上流者會の樂事。別
 世界のすまひになん。われは水に住
 む蛙乃仲間に入り。下流社會に徘徊
 して。飽まで世味を嘗試み。笠附連と
 友垣と結んと致す。乃ど。
 明治二十有六の十一月平安城南此
 とすらへ人。筆を浪華の容舍に和合
 散人に代理て執る。

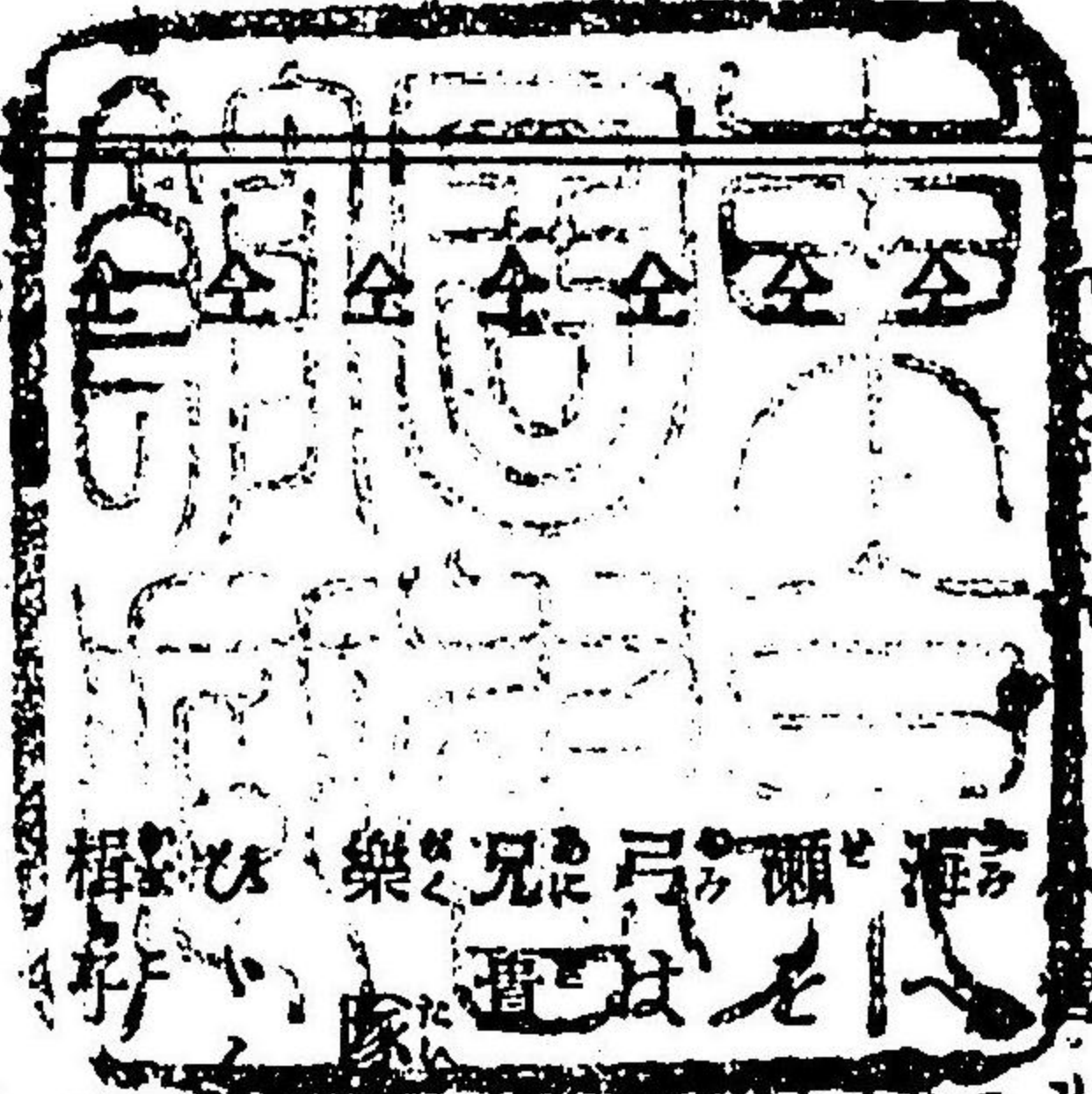
藏真逸史識

特66
945

附冠錦の囊

浪華和合散人撰

ゝの部



小便出來ん道ばたで
 捨る藝迄發明して
 結婚もして赤ひけど
 英文も有る状さしに
 筆も惜まぜ酔た手で
 ふくんだ筆は酒の氣を
 榊も戻り一取た
 ひやう砲聲も演習地の
 樂家目立栗丸の
 兄置願むといひ捨て
 弓は持して我弟子に
 願を迎ふて花蔭の
 響ひて祝砲は
 君へ御奉公と

全 全 全 今の世は

全 全 全

全 全

相手に成れん子供かて
學力無けよや實業家も
四角四面じや鏡迄
千聖の波濤も夢の間に
智力進んで貧兒さへ
山家にも無ひ明盲
寐坊を目を明き新橋で
折がかつたわらんぢど
居眠のんも悪ひけど
我がぞる禁酒廣告へ
犬の助太刀棒棒て
ゑらしかられじや花守に
けんくはしてよる宗論で
ランプ消しんか寐るのなら
胸にねさめて有る理さへ
世間に見へる目がお升
侗持遊の時計見て
拂はん氣なら節季かて
起て働さくては寐へ

いわけが花

いつも同じ

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

今時に
いろてる

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

垣へしどきやよひ中に
なんの鬼門がたゝろぞい
よくの付き初め親の乳
又春先は鉢山を
指はさむぞよ赤貝が
浮雲い幼男ち又ホヤチ
アレ又幼男が生花を
登りれふせた此峠
子供遊びに竹持て
湯をわかそやらば、呼に
そつての事あ乗後れ
乗後れじと渡しばへ
色はエ、タト紋際が
しやぼんで菊石落そとは
望の先は折んケト
思はぬ出世斷るも
猫が朝から神前で
世帯道具を小幼女さん
三味の張かへ御連中に

息をたぐ

いかんく

いくぢから

いとつてる

全 全 全
 いらぬ世話
 全 全
 一心不乱
 全 全 全 全 全 全 全 全
 いづくも同じ
 全
 いつ迄も
 全 全 全

よくやが 戎大黒を
 人馴た 鹿道者見て
 おかんいぬが奇ケンコツが
 金の番かてほつといて
 殺生赤梨子の真蹟つて
 にげる女犬どらまへて
 せめて成たさ人並に
 試験前には生徒らも
 幼女寫真やのかんばんを
 議士に成とて三百が
 弗子で拂て世の塵を
 てらしの引子そめても
 雲行見てる相庭仕が
 二匁以下は張二錢
 ニツは退かん色欲の
 昔思ふて無事訪ひあ
 木で仕た橋と又違て
 恥を忘らぬか寐小便
 駒よ巢を張れ 薬鍋

全 全 全
 いそぐ道
 全 全 全

とれも埋れて居やせんせ
 國家に大功立て置きや
 忠義で死だ人の名は
 心計りが先に立つ
 中く脇見仕所か
 今が出世の仕所と
 俄に空が降りそふな
 みやげに旅の日をちいめ
 いつはともアレけふは瀛車へ
 時計詠めてステーションへ
 張込でやる先引と
 おかんわんころたべる日か
 悲しい事と嬉しいは
 覺へた事は阿られて
 世帯始に受た恩
 詰つた時のお助は
 ひりみもろふて好の座へ
 女は氏がなかとて
 咽鳴らしとる抹見ると

入り
 一生忘れぬ

全 全
 一足どび

全
 いんらん

全 内の兀茶は基にかゝりや
 全 とこやそこらに居るお方
 全 幼女と喜代とは芝居には
 全 貧乏隙なしたらいふて
 全 時分に飯がくへん程
 全 由來開たら菅公の
 全 艸紙も筆も開化から
 全 歴々の衆へ交はるも
 全 置様で生きる植木やが
 全 幼男の小賣のはんこやは
 全 義務でかためた精神で
 全 まはるか曾根の松も見て
 全 てや甲斐性もんなわ風俗は
 全 剛めそこら臭ふして
 全 洋行仕かけて網舟が
 全 お廻り拳の勝ついけ
 全 是では濱も不景氣
 全 喜代お針が持てるので
 全 名所古跡を知る歌人

内うちの兀はげ茶ちやは基もとにかゝりや
 とこやそこらに居ゐるお方かた
 幼こ女によと喜き代よとは芝居しばいには
 貧ひん乏は隙ひまなしたらいふて
 時とき分ぶんに飯いがくへん程ほど
 由よし來らい開あいたら菅公すげこうの
 艸そう紙しも筆ふでも開化かいけから
 歴れき々の衆しゆへ交まはるも
 置おき様さまで生いきる植木うゑきやが
 幼こ男なんの小賣こうりのはんこやは
 義ぎ務むでかためた精神せいしんで
 まはるか曾根そねの松まつも見て
 てや甲斐性かいせいもんなわ風俗ふうぞくは
 剛いたちめそこら臭くふして
 洋行やうかう仕しかけて網舟あみふねが
 お廻り拳まわりのこぶしの勝かちついけ
 是こゝでは濱はまも不景氣ふけいき
 喜代きよよお針はりが持もてるので
 名所めいしょ古跡こせきを知る歌人かみん

全 全
 全 色氣一方
 全 色々結構に
 全 いそくうきく

せめて六日むいっぴちを越こす迄までは
 暫しばしく針はりは持もてんぞへ
 点掛てんかけて置おく爐開ろあに
 乍はつ憚おそ蛇へびの道みちは
 鮮あざも見殺みころしやけが來こにや
 親おやへ漕納こくさそ美食みじき
 わさしおみやげ御近所ごきんじよへ
 いくつ寐ねたらと苦く知らせが

ろの部

老らう人じん
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全

はらく薬ぐすりかんばんは
 めくらと車夫クルマが往來わうらいで
 そこが協議ぎぎうぎじやね互たがひの
 とふと水道すいどうも出來でてふあ
 研けん究きゆう會かいから斷家はなしが
 アレでエ、のじや商人あきんどは
 こんな西瓜すわくわが受合うけあか
 アンナ珍面ちんめんコテぬり
 遊藝ゆうぎ計けいに根こんん強つよて

全 朝からズボめうせおつて
 全 かるたチーバが流行とは
 全 寶のよふにヒメ状を
 全 ふられ連中師匠所へ
 全 砥石六道引走つて
 全 ろくにあり

はた部

全 初午で
 全 反對
 全 氷ややめて上かんや
 全 官員のか、兩輪では
 全 ヤシの心とチレの氣は
 全 お茶屋でお茶は忌詞
 全 外套は能ひがわけ見ると
 全 其した、りが逆鱗の
 全 昆布の香がして湯呑ふる
 全 齒ぬけに御馳走とろ、とは
 全 はら
 全 始りく

全 雪丹組重の片脇へ
 全 松を添るも魚あやの
 全 上手じや繼くと見せかけて
 全 大根も庖丁の手際から
 全 今に残して肉面と
 全 其日く、に探偵は
 全 顔見りや相應にエ、ば、が
 全 違て兄貴の盛りとは
 全 皆顔の色剝茶やで
 全 一人りや管茸帆と下げる
 全 いじつとさまでへ今の間
 全 古傘ちやつと泉水に
 全 羽織とやげん折々に
 全 是よりといやのぞきやが
 全 かつさくさつて池乃藻を
 全 狐め小便かけられて
 全 顔へくひ付鬼の面
 全 敷醫め景氣人力で

全 化て出で
 全 はでな事
 全 早がはり

全 走つてる
 全 罰ち
 全 走つてる

全 全

聞へぬけれどよひ事は
昔と今は人の氣も
うばれ顔見りや悦んで
馬丁が先へ馬よりも
ドンノ響で丁見めが
しやくりをとめる呪に
媒人は余人頼んでも
渡しの場所も便利よふ
便利に成た大井川も
操立よるアノこけは
一夜明れば六師さん
ゑ、か爺つさん踏へやせ
十七八は鬼じやかて
頃は野寺も賑はしき
よふ賣てやし姉はんは
三色を乗せたのし紙ふ
内ではせんこや茶で名は
親公もせいてちらぬ間と
長ひ小便の間もヒメの

全 全

夜は篝火で御社内は
日傘が目立山村の
犬でも恩は返そのに
朝つばらから馬つれて
種にしられて新聞の
女に針が持てんとは
媒人はいんでさし向ひ
只何某と書といて
今思て見りや今迄が
今度の幕が性根場じや
土地の徳でも有ふけど
澄んだ湯に入る大阪の衆
もてあしふりも茶料だけ
貧乏の徳じや七ツやで
お育てがらと懲られて
ひへから落ちてそつぱりと
浮世を捨てた雅の住居
流石夫者のか、丈で
余所へ行のも近所丈

全 せんちと井戸は衛生から
 はじめてる 連待かねて一銚子
 花が咲く コケがゆふやら丸わけに
 全 男はぼろそさげるけど
 全 同じやもめも女子には
 はて妙き 慥に有つた今こゝに

にの部

全 にくく笑 樽さへ見たら先生に
 全 煩魔も恵比須大黒にや
 全 ポント叩かれ脊中をば
 全 小氣味の悪ひアノ侘は
 全 ち、さへ見たら泣やんで
 全 何でもわかる新聞で
 全 助つて来る蚤と蚊に
 全 追々減つた氷店
 全 手ども書き小遣帳
 全 勝手もわかる花嫁が
 全 人んお有 日々に

全 出船の有は入船も
 全 ぶでも師匠の若ひ方へ
 全 瀧のこぼれが八百松へ
 全 似た曲し か、が強ひか貴公所も
 全 蓋取りやどこの内じやかて
 全 向さんも苦が御子息で
 全 成行開とうば同士の
 全 さそが總理の演説場
 全 通ひ道迄莞庭敷て
 全 しまりくさつて竹の皮へ
 全 鱈や鯨でそり鉢が
 全 臺所丈でいつ來ても
 全 諸行無常れ場所も今
 全 にげ わの雀さしホンどへた
 全 悪も運乃矢先には
 全 何でも親にこかしおる
 全 矢立に入る艾じやに
 全 手桶も分てそもふばの
 全 西も東も 鍵は渡そし身は自由
 全 荷が下りた

全 唐がらしさげて安々と
 全 満期歸郷で兵隊も
 全 時候の花も植かへて
 全 取は取たり遣るはやり
 全 にぎつて
 全 高ひ安ひと袖口で
 全 泣言斗りいふてゐて
 全 南地乃動議途中から
 全 鮎も鯉じやと網打が
 全 はんまに君が禁酒なら
 全 魚やよんだ客やから
 全 節季に家賃先生から
 全 俄 俄カラス巾くやら別荘守
 全 染ていられぬ西京では
 全 已れに汁粉の相談は
 全 彌陀佛連にアンメンを
 全 こちらへ知れん字を問に
 全 らい溜見て岩松が
 全 にこくと
 全 めでたいいつも御家内が
 全 人の顔見て氣の悪ひ

人見て法

西から旭

にげた

にぎつて

にこくと

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全 欲ばりば、に金見せりや
 全 好なお方の寫眞見て
 全 説論して居る警官が
 全 賑ひ
 全 川いつばいの涼船
 全 ドノ橋ぐも氷店で
 全 さのふの雨で郷村の
 全 船も渡にも篝火で
 全 今年は無事で祭りも
 全 お渡り筋は來客で
 全 そめで歸つた顔しても
 全 おはて、籠の薪と引も
 全 ふり向しよるそれ違て
 全 犬が歸りにそこ爰を
 全 満場諸君と演説士
 全 二王立
 全 二つこりと

賑ひ

にらまへて

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

賑ひ

初孫の顔お尉姥が
 隠居が喜代の寐ごま見て
 いつも家内が和合して
 松茸あがめお喜代めが

全 奈良で名所じやアノ瓦
 全 褒美もろふて學校から
 全 好た役者を譽られて
 全 どこを聞ても焼餅は
 全 尻目で己のぼたん見て
 全 衛生殿して虎テキも
 全 破れ團扇もかせぐ身にや
 全 馬もはだしであんたのにや
 全 先生禁酒の演説に
 全 戒も虫の居所で
 全 跡でもろふた附を見て
 全 取次母者も三度目は
 全 夜は這くせに番頭めが
 全 北らんだ的は外さぬ
 全 探偵の目もか、つたら
 全 ぞ、めた株の直上りで
 全 朝参かい其顔が
 全 お家も元は其筋と

ほの部

ほり出したもの
 全 予めかんならんほし店も
 全 内の猫めが三毛の男
 全 思ふたよりもアノ嫁は
 全 こちらほししいアンチか、
 全 アイツニ過るアノか、は
 全 わたいはいつち金さんよ
 全 張紙出来ぬ短冊に
 全 つりも取られ老神さんに
 全 石工地蔵の鼻決て
 全 厂首飛だ谷底へ
 全 古る木に困る又釘が
 全 宿所書巻に函へ入れ
 全 足袋びたに濡くらかりで
 全 女護の島へ行きや已も
 全 覺へた蕚が身助けに
 全 相變るよりマア結構
 全 吸込む煙朱らをから
 全 崩しも慈悲を取方で
 全 皆得手ものを樂作に

細い顔
 全 似たか寄たか
 全 にける
 全 ながい顔
 全 惚人の山
 全 細くど
 全 細長ふ
 全 ほり出して

全 日々に盛大嶽山に
 全 苦勞さそれるこらしめに
 全 足事を知りやくらしよい
 全 先第一は孝心に
 全 男前より金前に
 全 けなり姉はんエ、侘に
 全 受取書を小さい手で
 全 いつち信用が第一の
 全 廉價と店に勉強が

乃部

へるのが樂み
 又の逢瀬をくる指の
 氣がよひ仕こみした品も
 後へ残つて乳母の氣が
 脊中叩いて舌出して
 出直し升るお留守なら
 チヨト敷物と柏餅
 大床邊待たせ皆聞人
 無雅が雪見のお供して
 へんてつも

へた賣た
 歸參叶ふて問もなしに
 十が九迄もいさ乍
 チーパで迂り濱てふみ
 天狗も鼻を折よつた
 山場で痰が引か、り
 夏枯まらせ姉はんは
 國へのみやげ卒業証が
 輸出の數も日にまして
 ちくく節が葱にも
 うばも幼男ちのわるさには
 根ざしにエ、かまらんけと
 モルヒ子あんな吞なはれ
 啞め無心の斷りに
 素人と見へてアノ飴や
 へばりつく

との部

年が幾
 南廻りの禮も早ふ
 意味も知るよに耐忍の
 やけ松も湯巻取よらん

全 岩松もふとん負はんよに
 全 安して敷をはかそ方が
 全 なたま割ならどか喰が
 全 往たら身に付徳じやのに
 全 塞りや調子に乗丈が
 全 鯉釣にたら麥持て
 全 洗ひの手際折角の
 全 ぬざぐ紋日く、られに
 全 來年三十参りせい
 全 金はつてよるほら穴へ
 全 橋の上からへんねしで
 全 にくく符丁でうしられて
 全 空氣通して衛生家は
 全 少し張込み角の方へ
 全 後ち爲思やよひ方が
 全 始末は常じや肩ぬいで
 全 辨慶と有ればどこ迄も
 全 波風立巻識事堂も
 全 忍び逢ふのはマ、辛氣

全 戸を叩にもたいたかれ
 ず此垣一重が鉄の

同意く

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全 ヤシが起てるので不首尾
 全 軒にまよんばり朝戻り
 全 いそがしそふに御隠居も
 全 どころ年中の店おろし
 全 か、ばやくケド酒丈は
 全 低ふ行ぬと薄ひ身は
 全 三つに付た其くせば
 全 皆賛成そる徳の方へ
 全 涙が合点せぬ名殘
 全 御殿儉約軸の方で
 全 利目が薄ひ玉子かて
 全 いやもふ誰の異見より
 全 走つといてよる折目から
 全 べりく黒の紋付が
 全 廣言吐て出た物の
 全 ちへれ貸人が来てはしい
 全 明地の石も用に立
 全 香さして立涼車の客
 全 運が本復さそやぶ醫

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

とつくりど

全 子供の内

全 勘考もして娘

全 時めいて

全 蚊帳出しよつた

全 飛で出て

全 仕合せ網の破れ

全 跡さしの猫母者

ちの部

全 近い

全 細い虫が飛く

全 それ違ふても

全 狸々講でのむ

全 嫁の我精も鬼

全 相場してから

全 こんな小さい

全 一目見てあら

全 寐られん花の

に讀書を

勘考もして娘

まだおぼこ氣と思ふ

蚊帳出しよつた

もふ三番叟も

胡广はいられん

仕合せ網の破れ

跡さしの猫母者

冷いやり成た事

細い虫が飛く

それ違ふても

狸々講でのむ

嫁の我精も鬼

相場してから

こんな小さい

一目見てあら

寐られん花の

ちんまりど

全 磨きの竹で垣

全 カパンが代用

全 ぬぎ捨て駄も

全 茶の間か但し

全 派手に喰込

全 岩松も輕ふ

全 平民が有る

全 一寸待て

全 珍無類

全 塵つもる

全 ちびくと

全 ちりくばちく

全 ちくくど

全 温度につれて

全 渡御戻りの

全 塵の目はど

磨きの竹で垣

カパンが代用

ぬぎ捨て駄も

茶の間か但し

派手に喰込

岩松も輕ふ

平民が有る

茶漬くふ間を

愛相にさが

變ち趣向を

日々の儉約

八百やの通

貯蓄の利子

辛氣あもん

蚊は逃て行く

渡御戻りの

温度につれて

塵の目はど

塵も山

奢り人の目にや笑ふけど

りの部

りんきして 愚人はよその吉事にも
 衣類の袂まらべたり
 ゴケさん猫のさかり見て
 ついかんアレでおく下女も
 へちやな下女なら居付ケド
 國家の爲と代議士は
 近所で不和も同商が
 脊な向た成り夜を明し
 お迎ひ出そもお家さんの
 貳のさかり見てさへも
 位牌見てさへ先妻乃
 瀟車の發行見て車夫が
 落した文をか、が見て
 祝儀倒そも連中が
 師匠も困る連中の
 乳々澤山で幼男やんは
 力身かへり
 りんき
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 カんでる

りの當然

輕ふ動いて喰や味ひ

全

ウンと詰つて腕力も

全

洒落とる角行をなりこんで

利かいとさ

郡長が群集押分て

全

查公は職務双方へ

ぬの部

ぬくひく

いんま抜け出た寐間らしい

全

せ、りや煙艸の火位は

ぬさんでい

賞狀得てる一等の

ぬるま

チト成にくい跡取に

全

かぢらんかはり筆先も

ぬりもの

見へよふ今の鉄水繩は

ぬけ目あし

降りや車ひく氷やで

全

洋酒も小賣瀧茶やは

全

熟練の後も研究して

全

仕上た人で丁兒から

全

か、が内閣総理して

全

姉の仕込で座の呼吸も

全 手形も 蝋買よつて
 全 山葵も 所持か 網艇へ
 ぬかつてる 施主逃るとは 春衣装の
 ぬけさ 道から 用事拵へて
 全 附馬わやじやろし口で
 全 波チに 成網さわまひ
 全 漁車も 奈良迄全通して
 全 眠の 電報でこつそりと
 全 ちいさい時の 知恵は皆
 全 紐無ひ 湯卷脊のびして
 全 見てよつた 管道中記
 全 こそそり 脚半手廻して
 全 志まつを 溜めて 懐が
 全 太陽を 脊なりに 負て 居りや
 全 あその 日和は むつかしい
 全 また地しんでも ゆるかして
 ぬけさふな わんまり 帯が 尻たれで

の部

類なし 異國へいたら 喜代の 鼻
 全 いたら 菊石が 西洋へ
 全 東西ふれの くり丸は
 全 アンナ家督は 御門主の
 全 樂隊は やそ 菓子賣は
 全 築地は こまむ 相乗で
 全 赤袴 咄し 尙齒會に
 全 花やで ぶりを 撰てたら
 全 虫入の 葎花岡へ
 全 悴が 悴連も 連れ
 全 蚊も 成てよる 頭大坊に
 全 かたよる 金といふ 物は
 全 君子を 豊に 未明から
 全 首より 上と 薬店は
 全 夜影を 照と 針金は
 全 安ひケド ナアは しいケド
 全 窓打 風も 氣が 細る
 全 良薬なんば 用ひても
 全 挽壳に 禮を 吸付て

類がない 留守
 全 類がない
 全 留守
 全 挽壳に 禮を 吸付て

全 居そふな蟹かにの空あかじやケド
 全 うまひぞけふは喜代きよと巳み
 留守留守の間に 隣となりの猫ねこめお肴さかなを
 全 チウ介すけ猫ねこのめしくとる
 全 仕てやられたか晝ひる蔭かげに
 全 爰こゝでとるのじや洗濯せんたくを
 全 中々ちやうぢやううせた養子やしめも
 全 質屋しやくやのか、が西京さいけいとは
 全 ふへて來出きただとと扱金さきかねも
 驚おどろひた 雁月夜かりづきよにかし見て
 全 茶店ちやてんの付つにや桃山ももやまの
 全 嫁よめふつと見て鬼おにの面めん
 全 拜まがんでる 神かみも感應おんごう親おやの壽めいを
 全 朝あさの陽氣やうきを身みの無事ぶじと
 全 狀じやう袂たもとみにはエ、器械きやく
 全 さらべてよくあ事こと斗とり
 全 信貴しんぎあら向むかこへ濡連ぬれんが
 思おもひ同じ

どの部

全 よそさんからも橋はしかけに
 全 寒さむさ残りて桃山ももやまも
 全 年としをかぞへりや縁付えんづきが
 全 今いま比ひ出だたてよひちへが
 全 勉強べんきやうに添そふて福ふくの神かみ
 全 巢すをかける内うち忘れわすれ
 全 年とし數かずと見みへて折目せりめから
 全 昔むかしの事ことを土用干どようかんに
 全 朝あさつく鐘かねは能よひけれと
 全 辨士べんしの程ほどがよいのんで
 全 猫ねこに着きせてわ紙袋かみふくろ
 全 うばの馴なれそめ咄はなしし聞きや
 全 勉強べんきやう次第しだいで今の世よは
 全 氣きの合あた同士どうし旅たびとると
 全 錢ぜにも一つの遺ついでひよで
 全 見みれば見るほと貴公きこうの顔かほ
 全 虎とらと猫ねことの組くみ合あは
 全 訛あやりよる下女げまなぶつてりや
 全 よふマアアソナ伺口あほくちを

追々々

全全全全全全全全全全全

二ヶ國へ出る米古着
どの國々も器械商が
腐敗する程へば書生
歳末乃氣のいそがしさ
煙がふへる煙突の
殖て手利も今廓まに
鯉寐さしたたら俎へ
紋さへえらき俳優の
どおたるも鮮のお調へ中
苦情がおこらん小姑と
念佛聞て鳥さしめ
子に笛もろてやぶ醫者が
べかこしたので見せ付て
喜代の冠附聞て喜代
小僧逆見あ起されて
買ふ氣あらくと直切のに
箱且箱が選ひので
我身の徳の注意じやに
今度は甘い母者人も

おこつてる

全

全全全全全全全全全全全

全全全全全全全全全全全

小便やうらの島見て
切手のお客待されて
早よ去に内のかんでさか
深切とない取たやら
逆に聞たか身の爲を
慈悲の異見も聞違て
まだ寶のいらぬ豆の皺
ミスとさげると塙がうなる
人望得た身は轉任よ
暇に朽走楠の香は
いと、別のきぬぐに
汐先に海老たらぬとは
九分迄勝の角力じやに
一の瀧じやに腰打にや
年んが増したい親方も
此景をスメでノウ先生
すいらして置きや見へぬケド
喜代顔何じや炭付て
また姉さんがち、のんで

大きい

全

落付て

全

全

全

蚤どいふはづか、の方が
笑て濟しておこる場も
まさる 珍味は馳走より
山が崩れよが火が降るが
万歳 諷ふ 豊の秋
白湯も呑だり咳もして

わの部

わかつて

全

全

全

若ひ分別

全

わからんく

全

全

全

全

全

犬は戻りもかけばりで
野は一面に白と黄が
風は不粹でも宿引は
別にそげあふしていても
誤つて去にそふじやない
組違ふ手に力入れて
蹴落して見にや谷底へ
今夜ちんばでマア去にや
ヲキヲ演説聞かて
肩から爪の一方で
所問ふ程余斗泣て

全

全

全

全

全

全

全

全

全

若ひ事

全

全

全

全

全

全

若ひく

全

全

全

全

車上手で廻しよが
傘持ていこ損に迄て
正直そふに見へて、も
素面の時開て談判は
ハアわたいら乃行末は
いつ来るのやら身の運は
前に有ケド立石が
湖上は霧でけさの景は
何の意味やらゲンコツハ
峭の足くふ賀の隠居
姉はん上手化するの
まだ風がのらん十徳の
年齢に見へん筆勢が
同じ年でも子が無ひと
氣に心配が無うして
だしがねばるもスキ焼の
もふ少しゆでさや豆を
徳をお人じやいつ迄も
ナト譚のある御庵主で

全 聲はよひケドまた稽古
 全 加、間引菜と出して見て
 全 勉強仕徳じや今のうち
 全 隠居も喰へる此身なら
 全 理屈ばつてもどこやらは
 全 發明ナケドどこやらが
 全 せんち繁昌幕の間は
 全 何じやいふ氣か愛そると
 全 捨られたとは知らぬ兒が
 全 巾いて出た所物干へ
 全 權ゆりこむと橋蔭へ
 全 身丈も丁度紋迄も
 全 世が進むので人の氣も
 全 我先へ
 全 わけなしく
 全 笑て居る
 全 我一に
 全 雅もあり
 全 勝手がよひ

の部

歌會開いて涼
 商業俱樂部は俗あよ
 川鹿の聲は蛙より
 天狗が太をか、にして

全 路次抜たのでうら町へ
 全 ふしんでんぐの居た跡で
 全 一寸出力庖丁も持喜代で
 全 マ、嬉しやの内井戸で
 全 幼女第一に裁縫を
 全 何につけても呑喰が
 全 まだ馴んので洋服が
 全 朝から此子負づめで
 全 アンナ壯士の演説は
 全 炭團で焦る筆の軸
 全 お猿仕て上げよ糸お貸
 全 梅包んだら幼女せんが
 全 海老は手間もん江戸せしれ
 全 悟る一句の粧ひも
 全 美人も悟りや骸骨と
 全 竹や木でなひ垣はして
 全 思と義理とに手みやげを
 全 無事のはがきは何よりも
 全 古ひ御ヒイキ旦那はんにや

隠してる 風よふとどる内の猫
かんしんく どの奇進も惜げなふ

全 手の印を見て奉額の

全 月給で親も樂々して

全 薰る梅檀二葉から

全 お名は誰とも短冊の

全 ア、は出来んあお二人へ

全 嫁姑もア、レでこそ

全 月見はよかる此家は

全 魚なの使氣がさいて

全 鼻丈白ひでぼいどの

全 荷を下そかて氷やは

全 せめて晝迄置たさに

全 さへる月にも忍ぶ身は

全 ナミロく水の音もして

全 敷居越まそも式日に

全 惜む名残に見へぬ迄

全 掛金取て小便やに

全 旦那さん脊中にも一人

かんて鳥

全 野も晝良の喉頃

全 招き猫さんどふじやいな

全 發した跡は仕まひ瀧車

全 電燈も消へて涼み所も

全 浮世の塵の捨所は

全 揃たお長家嗜の

全 空に聲而已蜩しの

全 こ、らつまま、れそふな所

全 いつかて僕の懐は

全 聞人は猫と燭臺で

全 枝に小よりがそと爰と

全 螢の後茶島けも

全 庚ふ鵜舩の簪さへ

全 魚盤も釣て有寺で

全 世の氣樂さはけなりいが

全 逆茶や日覆西向けて

全 信がいやまそ瑞籬に

全 柴の衆丈で出合ふのも

全 春は雑沓な寺じやケド

全 可愛く

全 からくど

全

全

全

全 神

全 軽ひ事

全

全

全 かしこいなア

全

全

全

全 兼

全 かし性なし

全

全 風入れて

全

もふ消るじやろ電気燈も

伺ふな子はど親の身は

包せんべの音迷て

幼男のわたまの上の方で

慈悲有人が薄命にや

張とて雲の一字かき

鉛の入つた撥持て

何にもいへんテキさんに

狐餅でも喰て来たか

尻より口がこちらのか

一寸立ても師匠の子は

母者にこかして逃よつた

ゴケつまんどるへばくちやの

朝寐二食で濟しどる

エヘんどふれと一人して

親が娘の下駄直そ

か、の内職當にして

立ひざしてゐる椽先で

珍物陳列奥の間に

全

全 改良

全 改良して

全

全

全

全 壁に耳

全 かたひく

全

全

全 軽ひ事

全

口は門じやに禍ひの

よの部

全 余念あふ

全

全 世が直り

全

よひ神風が吹くかして

芝居も衛生注意から

家の造作も衛生家は

料亭でして結婚も

ぼてかづらでも蕨は堅ふ

粗悪は不利と気が付て

哥さへ薄ふ戀の情は

追々出来るはうた迄

立られぬ戸の透洩て

掛直もいぬんかはりみは

旦那はん鯛のあたまより

ふいなもふけは無ひかはり

荷籠は枝がふへたケド

頼もしい幼男持筆に

飯も忘れてよみ書に

何商も賣れる霜枯に

よひ神風が吹くかして

全 全 立る煙のにぎはしさ
 全 全 民の煙も太ふ立つ
 全 全 出来ると金が出来るほど
 全 全 我田へ水を引論に
 全 全 産着も別に染さして
 全 全 紙の鹿子も山家では
 全 全 若世一人の孝心よ
 全 全 所得もまして去年より
 全 全 氣もいそくと里の母
 全 全 因果じや金の番人は
 全 全 紙屑けつて見たりして
 全 全 おどる相庭を待っている
 全 全 蘭とおもとて又損を
 全 全 持て死事出来んの
 全 全 人は多いケド人は稀
 全 全 困る身も有る金が寐て
 全 全 来る也伺と見て傍へ
 全 全 村も参宮の圃取よ
 全 全 道の廻りも恩知つて

全 全 よくばる

全 全 悦び

全 全 よのめも合せ
 全 全 よくばりが

全 全 世の中に

全 全 よる

全 全 よひ時分

全 全 悦んで

全 全 いらぬ土じやに高ひ方へ
 全 全 車夫は芝居のばれ當に
 全 全 摘ものかたてうば訪に
 全 全 ござれ黠なと威など
 全 全 廊下登ろか鏡見よ
 全 全 腹押しや泣の持したら
 全 全 抜けん洋刀見せ歩行
 全 全 運動は愉快生徒らが
 全 全 ふとんはるやら土俵ばへ
 全 全 藝妓の寫真大事そに
 全 全 きらひ飛付く泥足で
 全 全 盃洗に浮く音開て
 全 全 合せ鏡にうつる笑み
 全 全 翌と立地下の若ひ衆が
 全 全 岩松お供のくじ勝て
 全 全 買たら安ひ蛤も
 全 全 寄附する信者北越の
 全 全 取上婆々を上客に
 全 全 子供使に賃もろて

全 留守と預る若女夫
 全 初産輕ふ殊に幼男
 全 たらして遣や伺ふでも
 全 入營期日指折て
 全 皇國の爲と適齡も
 全 容釣針のしじやに
 全 見せ歩行とるヒメの状と
 全 伺め丸きり腔の状を
 全 己れも男とそへ膳を
 全 交合つて居るに一疋が
 全 さらひ頬べたを指先で
 全 早ひ見せもの藏入が
 全 仕入のしびん間に合ん
 全 越中又五尺切らそとは
 全 交際繁く万国と
 全 過に耻はたらいふて
 全 地に飯も酒も有りど
 全 皆取巻も馬鹿旦を
 全 孫の手引て目の赤い

よばれてる
 横から纏
 世にまれあ
 代は豊
 よくの世界

全 へさくいふも伺旦に
 全 ほうらくの日は遠方から
 全 禪僧は笑て廻店を
 全 菓子料がものいふのんも
 全 動かぬ叱る斗では
 全 持て行んと知つ、も
 全 纒の夢と氣付おに
 全 西へ旅立そる迄は
 全 しまり無ひかはしらんケド
 全 立行咄し下方の
 全 鯛は住んでる一棟に
 全 廊の狐が客贈さ
 全 農事會には天保度も
 全 有志の世話も善根に
 全 さつぱりワヤヒや寐てしめて
 全 思はぬ穴へ迂り込み
 全 一坐も幼女のお手並に
 全 酔てから
 全 横手を打

たの部

高ひナア

一寸籟て見て調子笛

全

暑中見舞のハンカチハ

全

味あいくせに名物は

全

土用干の日はか、の鼻

全

またマア出来んばんざいに

全

茶席によばれ酒好が

全

おいでたうまひアツチから

全

ふろはエ、ナア川水の

全

エ、ツイ寐ると絹夜具は

全

紙幣を時かにやいもりでは

全

六尺かいて越中は

全

萩見にいても瓢さげにや

全

若ひお醫者は功者でも

全

連が薄ふて懐の

全

親も親なら敷札も

全

一人旅すりや黄昏が

全

せめて幼女でも一人丈

全

楚がふしい杖よりも

全

そめで身請がしてほしい

全

夜さり笛吹先生で

全

旅で懐ろ切かたて

全

長家一統へ禮いふて

全

登つた道を見下して

全

床か内より気が張て

全

客やは義捐募集にも

全

なんざしよるかさしよるか

全

健も渡した限りには

全

職場へいたら造幣の

全

榮螺どもして堀穴は

全

欺そ手で書實意文

全

歌よんで寐よ人丸の

全

若且一人にこくと

全

末の身儘を苦の中よ

全

日に増愛を氣便りの

全

殖そ道具を俱々に

全

枕に出来んまた徳利

全

ふん廻しとる猫鼠

全

盡へも分て蓮の根を

全 預々て置ふ蠅入老へ
 全 宵から筆の敷よんで
 全 勉強する子はしけん日を
 全 昇る等級が氣の張りに
 全 貯蓄を竹の筒にして
 全 笑て居よケド驛遞には
 全 持遊にぞる馬鹿旦を
 全 人目にや利口さふじやケド
 全 句に成よらん最一字で
 全 切の景事是からが
 全 屋茶へ迎ひもやぼじやケド
 全 つい荷も重ふ町へ出りや
 全 跡へは引けん男なら
 全 義務を尽そが人の人
 全 ふじ川の石荷の中へ
 全 伺め香物の口明に
 全 やもめの向ひ撰手に
 全 心もち丈此帳へ
 全 名の夜を包むら雲は
 全 玉に純

全 叩いてる
 全 よふ語るケド詛るのが
 全 蛸賣自慢打鍵で
 全 どの酔隣取違て
 全 荒ら迄味ふ喰へるよに
 全 盤の横づら勝の方が
 全 アレが人よせ咄家の
 全 元は一人の發明じやが
 全 折でみやげに惜氣なふ
 全 未樂しみに子寶は
 全 伺も有るん水揚の
 全 おこりな向は商法じや
 全 磨上てる石盤で
 全 氏の無ひ身と悔むケド
 全 磨き上たが御歸朝の
 全 直は直丈でへ尺御らん
 全 けふは乘らいでも水船に
 全 時代は余る呂太の聲
 全 根は浮艸といふやつで
 全 難義もさゝにやこりる迄
 全 だまされて
 全 澤山に
 全 玉

全 樂しみ
適々

我精好まにや器量より
螺よ花よと両親が
茶漬ぐらいてはつとけん
客やのん氣に行のんも

全 資

マア四五日もゆつくりと
納めて置ば身の内へ

全 奉り

財産よりもまさる智が
義氣を見ぬいてどがり人が
一穂は早ふ氏神へ

全 例の通

歳暮に添ふた手紙なら
籠釣日の献立は

れの部

全 例のんじや

國扇仕込で呉服やが
手を握るのが西洋の

全 禮

土俵てふれる關の花
橋岡へ寄る御連中は

全 れきく

退いても安氣後見は

全 全

茶箱も提て萩の座へ
時節負やら割場に

全 連中そろひ

軸もめでたふ入船に
出立時間で鶴やにも

全 禮義正し

紋付着よつて岩松も
昔忘れき式日に

全 れきくで

向ふに見へる白壁か
支店を多く海外へ

全 全

門口の札一等を

その部

全 夫見たか

衛生かまは老園子喰て
番してんカイ焼物を

全 相談して

マアく先へ紙入と
ボチを仲居の立た間に

全 ぞつとどる

めで度お禮も媒人の
岩松春筋にぞろくと

全 全

書出し箱を覗ひたら
建てた茶店で萩丈に

全 安ひ 請取 普請 なら
 全 學校も 違て 市中 などは
 全 直引 仕た 余の 添物 で
 全 畫こそ めでたい 扇じやが
 全 瀬田 から 荒ひ 瀕を 見て
 全 宵の 丁子 は 吉相 で
 全 ぬが した 寐まさ 椽先 へ
 全 身代 も ろた 親の 恩
 全 お居間 へ 昇て 頭大 坊を
 全 はじめ は 許そ 此後 は
 全 商業 に する やさ つぎ や
 全 辭宜 する 拍子 思は せも
 全 紙入 よつた 香で んに
 全 何と お詫を 申や ら
 全 待丈 打て やり 升と
 全 發車 時間 に みやげ さへ
 全 宵寐 よふせぬ 若女 夫
 全 岩松 が こまる 幼女 の 供
 全 番頭 の 夜這 お家 迄
 全 そつと 吹き

全 幼男 では 菓子に 矢が 立ん
 全 お瘡の 種を お喜代 から
 全 姉はん アイッ 探訪 やし
 全 惑亂ん の 元井 戸ばた で
 全 走り ぞまん の 車や が
 全 其所を うち過

つ の 部

全 月明り
 全 忍ぶ 戀路 は 顔が さそ
 全 かぼち やも 長ひ 影ばし が
 全 ほしい けれども 身代 が
 全 五升 鏡に みかんで は
 全 まだ 捨兼る 御庵 主で
 全 手放れ 仕事 左官 やの
 全 榮へる 店の そろばん の
 全 重も 成につけ 竹筒 が
 全 ド 伺め 起請 大事 そに
 全 筒ぬ け何を 聞たか て
 全 俄見る 方が 芝居 より
 全 呑んだら ぞぐに 寐て 仕もて
 全 罪無し
 全 月に も花にも
 全 つや
 全 釣合ぬ
 全 月明り

全 全
 積上て
 つまらん
 全 全
 爪かくそ猫
 月夜にかま
 全
 つ、しんで
 全 全 全 全
 全 全
 尽と力

こちら見物高見から
 春でゆられて眠る兒は
 持旦と見てや茶れか、
 去ねを今更古郷へも
 子寶斗り殖よつて
 常のつばらが節季おは
 そりや通る筈サラさせる
 焼ねば止まぬ酒ゆへに
 飼人が無ふて町猫も
 見んふり無地の風鈴も
 かしや札見えて掛取も
 連中も師匠の結納見て
 風引んよふ唇の
 親のゆるしを受ける迄
 詞數さへひかへ目に
 七去のうちと更た戸も
 嫁姑も中よふに
 かんぞ事には恩慕て
 議する減税も國民へ

全
 つまらなひ
 全
 つらいく
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 つきませせて
 つんで山
 全 全
 つんどして
 全 全

傾く主家引受て
 日曜祭日重つて
 人の手活を詠めても
 異見の傍に辨慶が
 四百四病の其外で
 一人しよんぼり線香塙で
 媒人も悴突ばつて
 喜代の腹見て番てきが
 苦ひ顔見とお茶引と
 店は立派に張つて、も
 たんと請賃もらはんと
 規則變りて町猫は
 老も若ひもねどり塙は
 氣のエ、計り梅やさん
 資本も出来て貯金から
 記者の机に原稿が
 アレでエ、のじやゴクさんは
 銀行の丁見にくてらし
 雅な生方かしらんケド

願ひ叶ひ

川で寐るよにをし鳥も

全

ほしがる妾が青梅と

全

町風でれ禮自安寺へ

全

鯨の橋をうばつれて

全

留ました身が待よふに

根がはへ

弟は繁花れ地の土に

全

四爐裏のふちが退きにくい

念の爲

けし壺撫て寐しなには

全

寐しなに自分ふしん塙も

全

落して銀貨板の間へ

るの部

何くそ

そこへ繼ぎけ白猪口に

全

己も男じや肩ぬいで

全

内閣迄も往ける世じや

全

山椒國じやが東洋の

仲間入

しらぬかやまと魂ひを

なまけきひ

目がね頼まにや新聞が

全

好んお客に思はれて

全

廻らぬ舌て爛せいと

全

薄化粧して皺づらに

全

間夫じやくといふ侗が

全

金で情けを賣身とは

全

えんし張よなそへ膳は

全

又いちや喧嘩始つた

全

とふとお喜代に折れ込で

あぐさみ

内の着料に養蠶も

何べんも

忘れぬよふにぼん本を

全

とふぞや行たら行ぬたら

全

よだれ流してレコの文

全

色よひ返事聞たやに

全

アレ開飽たアノ人の

全

よみぞこないのないうふに

全

さらへ講前で小幼女さん

全

金びらさんもおかしかる

全

誤聞ないよに探訪者は

全

もふ本極りたらいふて

全

こへ入たと思ふので

難所越し
脚て磨りやころ

今ぞ笑ふてくらそ身に
とるらい蚊でもさのみ苦に

全

よく走るナア人込と

全

ポイく肩へ仰仕らが

全

毎晩受る銚先も

長短

一寸摺鉢かした氣で

全

下手な刈よで散髪の

全

靴下かはれ目が違て

全

見飽ましたと湯やれか、

全

遣つとき遊びがてらでも

全

牛追ふ歌も若旦那が

全

美術が増して模造にも

全

喜代の續いだ糸のよに

全

初手は巾つた太棹も

全

喜代迄漢語官宅の

全

寐酒の間も出来るよに

全

通辨なしに赤ヒゲが

全

侘欺すよよ小猫迄

全

持つて死ねんといふもの、

おけれはちらん

何ともかとも

寐たい旅人森蔭て

全

コツアの雪が酔さめに

全

田にしが蛸をくてる顔

全

ゑぐるはらはた正宗が

全

いんさん熱ひ湯に入ると

全

和尙ゴケ公のかたもじに

全

金魚の敵討たケド

全

寐起に冷たちりめんが

全

泣しくさつた作り身が

全

拍手たへぬ菅公は

全

廿歳前後でゴケ立て

全

よふ利くけれと長門やは

全

吐た廣言笑てたが

全

八十路越そ身が袖もして

全

か、南瓜の検査なら

全

珍味へ小首雅な客も

全

見てくれ早く號外を

全

先拂て置て酒や丈

全

何よりかより
一家揃ふて息災が

全 全
 木綿着るよに身も成て
 横根も漸々口明て
 堂島連はお座敷も
 夜店出そ也俄雨
 突落したら蜂のそを
 氣根ん界へと世は辭して
 酌そる人も會席は
 駕も困つた味じやが
 娘の蔭で食てるば、
 鬼子の蔭で鬼ば、は
 全 全
 エ、腹へらし鉄持て
 土ふまをして世界中へ
 樂なよの中
 樂しても
 全 全
 筆にいそがし月雪の
 苦に成る兄の放蕩が
 未のつまらぬ蔭の花
 全 全
 向ふ見て
 適した寓居出養生に
 車横丁へ相のりの

むの部

む 全
 金主もなしで會社とは
 負してくれといひじやケド
 首傾けて代言も
 ふうばと喜代の相のりは
 親父の權でも子忌中は
 両手で粟をつかるとは
 目に成る石と取ふとは
 其物しるで初ものは
 大事の番も寐よつたら
 結ぶの神へへチヤ幼女が
 幼男勸商塲の入口で
 ぎりの妹の花買はそ
 幼女呉服やの荷を見たら
 浴衣と拾入かへに
 最一つ入れて松茸や
 違て賣塲の庭醒と
 斯ふ降雨は在方にや
 ほれたよくめかえらんケド
 今度で二へん肝つぶし
 全 全
 無類天切
 全 全
 昔し人

全 無性やたら
 全 若旦那悪魔がさして
 全 絶ちとまらせ身を削る
 全 損は承知の競争家で
 全 喜代は問はれて帯の直を
 全 息子へ異見 悉頭迄
 全 鴨とは違て浮寐にも
 全 團子手傳ふて小姑も
 全 名も差込でお坐敷へ
 全 お客が渡し起して
 全 通ふ千鳥も舞子へは
 全 酒がさめたら酔どれも
 全 高砂て 鞆 帆柱が
 全 茶碗の音で居候が
 全 狐が来れば狸寐も
 全 岩松と犬のさかり見て
 全 古ひ貧乏じや長家での
 全 赤んの石碑でこんそやら

うの部

運よくば
 うつくしい
 全 今に我等も 帶助の
 全 おしろいぬらんゴテの氣は
 全 一割徳じや宿引は
 全 心は夜双かしらんケド
 全 狎の啼格子覗ひたら
 全 裸て 貴た 丈有て
 全 長家の藝妓借たので
 全 うぢく仕よるしばん裏
 全 虫も地を出てひがんから
 全 御新造 赫た 豆拾て
 全 飽て二階の居つつけを
 全 年酒でおましょ附の來る
 全 學費くくと 國元へ
 全 取上ば、の來ん先で
 全 夜這が喜代の大聲に
 全 地震へ蚊やを出そお喜代
 全 販醫治した 作病 丈
 全 鯖賣貸ていによつた
 全 種伺預る 在の 伯父

全 染屋も極る吉日に
 全 ヒヲやも圍ひ取迄に
 全 半分傘をかしたので
 全 通の沖へ鎌提て
 全 氣に無ひ皺が顔に寄る
 全 金とほり込むのろけ客
 全 喰ひにつられて岩松め
 全 聞た名所を來過した
 全 お丁坊も上手廓馴て
 全 お娘笑顔でぬふ油簞
 全 摘人が出來てげんげ花
 全 句ひも東風で太宰府へ
 全 放蕩習ひにはか書生
 全 はがきは安ひ僻地へも
 全 おかしい喜代の物いひが
 全 舶來品は高ひはづ
 全 雁が去ると燕が
 全 兄が歸朝の内祝ひ
 全 學士の號と樂しみに

全 海山こへて
 全 ぼるくど

うるはしい
 全 うんととんと
 全 うまひ事

全 異名も有つて楊貴妃の
 全 棧敷へ皆の眼も散つて
 全 煙艸も柄杓置迄は
 全 金どる秘密姉はんは
 全 酔ざめに呑めや汲置も
 全 よふこあしよるあひ聲で
 全 か、も呑人で料理方
 全 喜代麥わらの細工して
 全 姉いはん手管いつとても
 全 洗石夫者じや口先で
 全 仕てかねもろてアノゴケに
 全 猫のお供に猫さげて
 全 川といふ字の、脇へ
 全 筏景に添ふ嵐山の
 全 雲雀はめたり野を見たり
 全 師匠れ悪ひくせの方が
 全 つい悪ひ方へお子達は
 全 さつしり合ふて辻占が
 全 紙で眉毛を隠して見

全 全 待て居升とかな書で
 全 全 もふ極た日が近付て
 全 全 楽みもせにや分相應の
 全 全 うそついた
 全 全 みやげの殿迄ぬらくらと
 全 全 親に安心さそふため
 全 全 二度も三度も初物と
 全 全 起請誓文千枚も

のの部

残り
 全 全 貯金へ入れて月々に
 全 全 手に汗にぎる見物が
 全 全 まだちらほらとチヨンまげが
 全 全 埒明た土用心に
 全 全 みやげに折へ詰込で
 全 全 お容お進め他所行を
 全 全 雲雀も姿見へんほど
 全 全 風入れに出そ箱入る
 全 全 思はく替よか芝居より
 全 全 けふは放して牛も野へ

全 全 名ざしが揃て箱旦那も
 全 全 川といふ字も野邊歩行
 全 全 兄よ別品見飽のふ
 全 全 音頭もいさむ氣もいさむ
 全 全 残る咄しをゆつくりと
 全 全 母にも一度相談を
 全 全 お相伴ゑら酒の坐へ
 全 全 先生はか、が里灘で
 全 全 案内状貰て葺山の
 全 全 貰や氣も張る他人から
 全 全 土樋にそるより鉄管が
 全 全 内の娘は果報者
 全 全 福相はしれる耳見たら
 全 全 氣が高こ成て歸農から
 全 全 軍醫も御代の豊さに
 全 全 世話行届く鉢植の
 全 全 重ひ身軽ふ遣のも
 全 全 若ひ間に働くる
 全 全 内に置とさや間に合が

全 全 望む所
 全 全 後ほと
 全 全 のる
 全 全 のらくと
 全 全 後の爲

全 のどか

ならん中から夜學など
瓢でも提てぶらくと
金さへ有ればいつかて、
つい人乃氣もうきくと
空に舞ふ日は丹頂の

くの部

願成就

數年苦心の洋行も

全 くり上て

繪馬上るやら御膳やら

全 くらがり

店中一人は別家から

全

漬物桶へ小便を

全

何してるのじやれ竹どん

全

こはくめぐる舍利寺で

全

出店か出来た額ひ口

全

目が明いて、も無筆やは

全

呵られてよる車ひき

全 くらひく

無ひ物で鼻打そふあ

全 ぐせに成り

箸置とそぐせんちばへ

全

短ふ着ても襦へ手が

來るたびに

よるし頼むと近所迄

全

祝炮て知らず着岸の

全

一寸のまそと悦んで

全

斯ふまわ世話あ成て、は

全

嫁の不足を口ぐせに

雲

散も始めせけふ翌とと

悔しがり

我の不勉強さて置て

全

伯父の異見にめがさめて

全

此立石が物いわん

苦勞して

親の詞が今光る

く、り付

身の納りと子息にも

全

もりの脊中へ佛さん

全

おかしな虫の付ぬ間に

苦もなしに

笹に俵を吉兆の

全

明學坊の即席は

くさひ

翌そは新湯か温泉の

全

蠅が集會仕よるは老

全

魚な屋是が晝網か

全

二人のそぶり何となふ

口明くちあいて
 くらびれて
 全 全
 くり返し
 くつくと
 全 全
 くせが有ある
 苦く
 全
 暮くのかね
 車
 委くはしい
 來くる
 矢やの如ごとし
 全
 マア是こで樂らくでさ物ものも
 板いた塙はひよろく東雲しのめに
 全 全
 よふマア悪わる作さ寐ねて居い升しやう
 寐ねたい一ひと雨あめ降ふるたなら
 全 全
 試し験けん前まへにはよむ本ほんも
 乳う母ぼめ木この葉はをのけよつて
 大だい工くのれみを見て喜き代だいめ
 全 全
 ねつからうれひよふ利きて
 せんち行ゆる飯めしくふと
 苦く
 全
 なんば吞のんでも吞のみたいが
 毛ひの生はへんのもむげんのも
 猫ねこ化け粧しやうして店みせ先さきへ
 全 全
 銀行ぎんぎやう通とおひは注ちゆ意いして
 漫まん遊ゆうえて來きて海かい外がいへ
 來くる
 稼かせでいたら福ふくの神かみ
 竹たけ馬ばも杖つゑの友ともとして
 岩い角かくよけて柴しば豚とんが

やの部

全
 やれくまわ
 全 全
 うばが噴はな着きを手て傳たに
 氣き片ぺ付つして除よ夜やの鐘かね
 念ねん佛ぶつの止とむ船ふねの中なか
 全 全
 いねつむ斗ぼり斯しかふしたら
 山やま 全 全
 はんなりとした出だし物もので
 札は張はりよつて所よ得とく税ぜいの
 當あたりや人ひとあも成なれるケド
 全 全
 殘のこる寒さむさで着きる帽ぼうし子こ
 電でん燈とうも引ひて店みせ先さきへ
 全 全
 報はひよもなひ御ご恩おん義ぎに
 首くびより上うへの藥くすりなら
 全 全
 自ま由ゆうの權けんじやはつといて
 全 全
 禁きん酒しゆ破やぶつて浴あびてやる
 地ち面めんも家いへも穴あな藏くらへ
 全 全
 鯨くじらも猫ねこにかつたら
 長ながの工く夫ふうも特とく許きよ得いて
 送おくり届とどけて頭あたま大だい坊ぼくを
 全 全
 乱らん酒しゆに成なつて煤すす人ひとも
 全 全
 鍵かぎも讓あづつて若わかひ世よに

全 全
 皆夫れく片付て
 浪間に見へる燈臺が
 君の丁ちん持のなら
 別に茶代を置いてやれ
 一寸思わくして見よか
 長閑な空の野へ出たら
 晝寐の邪広と松へ来て
 隣へうせてけいこやが
 揚りくさるとヤケ猫が
 無雅にや哀れさ虫乃音も
 苦みし寄合て宮本で
 おれが語ると聞人めが
 違て太鼓のはやまとは
 女の寄つた職工場は
 管弦の音も愛さ耳にや
 折にや利を喰ふ金時計
 チヤンと裕又綿ぬいて
 明た所から見晴しが
 一寸先黒がおへて来て
 やめく
 安ければ
 やかましい
 やりくり
 宿がへ

全 全
 たんそも御殿飾る日は
 そはつた隣お大名で

まの部

誠にめでとふ候ひける喜の字を古稀の夫婦づれ
 全 内は揃ふて壯健で
 全 謠おやめて媒人が
 全 床入迄も見た媒人
 全 樂しみじやナア川の字で
 全 手代いふとる銀行の
 全 まだ部家住で若旦那は
 全 顔見る斗寫真では
 全 人目乃關に隔られ
 全 別品じやケドよそのか、
 全 成程それで自然態か
 全 又かいな
 全 又かいな
 全 改心するも聞飽た
 全 全
 まけおしみ
 まかんとはへ
 ば、めは飽じやぬかしとる

全 待て居る
 全 香たいのじやとへボ奉め
 全 日曜練つて遊惰生が
 全 小間でころりと狸して
 全 年の明のをだまされて
 全 入營期日指折て
 全 御國の爲と適齡も
 全 辨當持て紡績へ
 全 ソラ菅公の御詠にも
 全 見せたい胸が割るなら
 全 かの湯もじをふるしきに
 全 伺かしわやへ吸煙を
 全 産婆のとなり叩てる
 全 丸ひく
 全 どこでものりのかんばんは
 全 這出の喜代は遣ひよひ
 全 げん直し
 全 氣よふ一盃遣つてくれ
 全 赤飯焚てくれけふは
 全 けつこう
 全 とかく下見てくらしてりや

けの部

全 何寄家内お達者が
 全 是丈捌けにや薄ひかて
 全 萩に出よつて桃茶やめ
 全 住たいアンナ隠所居に
 全 漁車や漁船で斯はいかん
 全 京市眼下に雪見酒
 全 手際を譽て盆石の
 全 先生米喜の澤鶴に
 全 第一等じや造幣寮が
 全 高ひ線香も夢の間あ
 全 兼過してよる若女夫
 全 少しへつらにや兎のを
 全 釜日にやいつもか、さきに
 全 幼女は幼女同士連合ふて
 全 らうそくやから手始に
 全 不拂したら茶やのば、
 全 邪蘇はお釋迦やあみだ見て
 全 當坐は何じや雇た齒は
 全 けつたいな
 全 けんもほろ、
 全 けいこ
 全 けさも又
 全 煙
 全 下駄はいて首
 全 けしさを詠
 全 けつくらへ
 全 全

朝歩行よが花嫁の
 朝歩行よが花嫁の

全

有る人見ると鬚ちんまつげの

ふの部

ふきの山やま

鹽しほの切盤きりばん景氣けいきよふ

全

けなりはへ際ぎは幼女おんなさんの

全

夜よるはいやがる虫むししやケド

全

働はたらくといふ一徹いちてつが

全

出来たれた別品べつひん末町すえまちに

古ふるくたう

豚頭ぶたがしら姿すがたで節賣せつうりに

全

置いてやそんち出だま物は

古ふるひく

家主いへぬしよりは奥おくのば、

全

例れいの禁酒きんしゆがテキさんの

全

淀川よどがわ夜よ豚落語ぶたらくご家の

全

據たもとなふ付合つぎあひも

全

親おやの病氣びやうきもお喜代きよよどん

不器用きこやうな

士族しぞくが知しれる掛引かひきで

全

春はるは請社こうしやの下さげヒラが

全

出でてるせ大將たいしやうばつちから

全

關羽くわんうも日曜にちよう桃山ももやまへ

全

もみちを當あてに瓢ひやうさげて

深ふかひく

勝かつつたちへを隠かくすとは

全

海うみよりも猶母あははの思おもい

全

祭まつりつた店みせの土人つちびと形かたち

全

耳みみへ三粒さんつぶの米こめがのる

全

氣きに正直ちやうじきを守まもつてりや

深ふかひ望のぞみ

居い馴なれた土地とちを出でるからにや

この部

全

けつく學資がくしの薄うすひ身みは

全

運任うんにんして天道てんたうに

全

なんぼくれてもアノゴケにや

全

損そんして己おれれが明あかぬ眼めで

全

味あじふ喰くはした追劔おひにや

全

うづかり乗のて口車くちぐるま

全

ふと道みちつれの深しん切きりが

剛傑どうけつ

還曆くわんれきの賀がに升ます香のかと

全

店みせの手てから喜代きよよどんは

断つつて

内うちの惡作あくさくに又またしても

全 近所へ翌のど、掃を
 全 乳母の床の間巾くも
 全 馬と聞たら赤衿も
 全 弟へ家名譲るのも
 全 眞身が揃て職弟子の
 全 ふられては往き又ふられ
 全 か、も内職まけん氣で
 全 目見への晩は男妾
 全 下をくいつて類店の
 全 やめくアソナ頼母子は
 全 霜と舞じて置露も
 全 もふそんなお子お升のか
 全 可に成等我腰も
 全 無事に勤めて三年も
 全 忍ぶにはよい月の暈
 全 茶會基會と御隠居は
 全 ば、も娘の出世から
 全 極樂
 全 今晚は
 全 光陰は矢
 全 疑て
 全 心から
 全 こんくらべ

ての部

全 手の如し
 全 出張つてる
 全 天
 全 鉄炮はなし
 全 手柄次第
 全 天のぼる
 全 出たらめに
 全 口三味線の花戻り
 全 附て有るやら付ぬやら
 全 枝へや哉の短冊を
 全 姉さに時間問ふたかて
 全 花の一首も酒の興に
 全 無雅もまけん氣筆持て
 全 新酒は安ふ付けれど
 全 筋ふやそのも洋服の
 全 財遣ふ世じや身の内の
 全 どちらへいても仲人口
 全 三方飛んで出るおたつ
 全 うかつに聞ぬあの人
 全 被る濡衣もいつぞには
 全 よふ欠る所三味線の
 全 便利じや西瓜喰のんに
 全 日本地圖で能登の國
 全 紋もほつたり両足で
 全 演説會へ警官が
 全 人遣ふのも思ふよに

全 其場のがれのいひ譯で
 全 何哉母者へ氣休めど
 全 夜店の植木直をとふど
 全 夜店の骨董名を聞と
 全 反古にしてよる宿帳を
 全 わたいら弾けぬ太と持つと
 全 鼻の下さへ動いてりや
 全 此どしふんの手ざはりで
 全 いじろ番付出まて來て
 全 煙東へ煙筒の

あ の 部

全 雨ふりに
 全 唐崎の宿上まんで
 全 口が乾くとほし店が
 全 惜ひけふ翌満花じやに
 全 獵せにや喰へぬ身を悔
 全 思や身業で欺そケド
 全 燻べにやならずくさべると
 全 兀たわたまに日が照で
 全 暑ひく
 全 浅ましい
 全 全

全 人氣寄るはづ瀧茶やへ
 全 チト助言方のいてんか
 全 其れ詞が何よりの
 全 よふマ言ひよる又借せと
 全 どり語るとはアノ葱が
 全 足が電話れ代理まて
 全 花嫁丈でたそき迄
 全 幼女のおさへた目と裂が
 全 土に機能が有のやら
 全 景氣も増して開業の
 全 皆おどつてる肩ぬいで
 全 服はでな事樂隊は
 全 袴丈じや無ひはべた迄で
 全 うぶ湯の透り見渡そと
 全 臍月夜も忍ぶ身にや
 全 一厘投て神前で
 全 例の禁酒か旦那さんの
 全 身請そるとは拾ふたら
 全 のろけてる氣が真に受て
 全 赤ひく
 全 跡さしで
 全 厚ひく
 全 全
 全 明ひく
 全 商ひはん昌と
 全 伺らしい
 全 全

全 素人と取て負て來た
 全 贖札取つて禮いふて
 全 今迄待て待ぼけか
 全 跡から見たらソレあたま
 全 茶づけエ、ナアなら漬で
 全 アンナ顔していやみして
 全 年にも恥せアノ人は
 全 好きなものでも毎日
 全 手生の花にして見たか
 全 始は好いた中じやケド
 全 イツも異人は酔たよな
 全 今度の雅達者そな
 全 さびそで殺しそこのふて
 全 恥し矢立さして、も
 全 飛鳥川 直賣仕どかにや新形は
 全 笑へん人の落目かて
 全 認所と惜ひ手で
 全 有がたひ 國會開け人民も
 全 愛嬌たつぷり 程賣てよる物まへで

全 露帯ふ姿海棠の
 全 賣人はか、に任しとこ
 全 憶てるよふに誰にでも
 全 黒は黒丈とこやらが
 全 愛嬌有ける よく松めボチの顔見たら
 全 秋が來て 都育は訛りあも
 全 もふ樂してる刻つるべ
 全 解て仕もふた氷店
 全 車夫が不自由なドノ村も
 全 ないどる鹿も氷やも
 全 申ぬいてやり浦焼の
 全 あふないく

あ の 部

全 定めなく 諷出えならあさどでの
 全 さし向ひ 目出たふ立てた門松は
 全 膳は一つの新世界帯
 全 八幡山崎船で見りや
 全 無心の種かいふ情事も
 全 さては 喜代の盛様で店の衆が

榮へ行

全

全

新ら

全

誘合ひ

全

全

里馴て

盛りは今

全

全

全

全

全

全

全

全

先に立

三味線

客切れば無ひ勉強家は
 仁は家にも濕ふて
 敷でいく方が安賣つて
 出がけ買ふたら十銭も
 寐ても氣がエ、櫛の香して
 羽子をもらひに娘たち
 一字はよめん字じやケレど
 職かたげに行悪作
 立のは花の頃じやケド
 遣ひ能成るも居よ成も
 書記入用と廣告に
 賣負るのも婢の方が
 移りがよふて何着ても
 瀧而已白の山の景が
 廣告出まて山主も
 乳母の里から案内状で
 梅が辻たら張紙に
 迷ふ山路に柳の子が
 猫比露命をつまぐのは

全

幸

全

全

全

全

全

さつぱりわや

全

全

全

際限なし

全

全

全

全

全

捌けてる

全

ぞんごふ

幼女は戻りに傘の柄を
 貴公が誘ってくれたので
 こつてる所へ笛ふいて
 向ふが逃てくれたので
 隣りも廣ふ退かしやつて
 知つた車夫よふ雨舎り
 鯛を貰ふて巡る日に
 學資は入れて娼學に
 若旦那や無ひばかりで
 此大雨が萩茶家は
 鏡から錆て下ノ宿も
 いのく惜ひ時雨でも
 座がねもしろいヤケの方が
 夫者は夫者丈有つて
 根が浮艸の果丈で
 いつ来て見てもこのか、
 氣にも入はづ姑の
 親父も極伺した丈で
 陰者も花の咲頃ば

全 聲なふてよふ繁昌店
 全 安賣りや買に来る客も
 全 砂糖の有所よふ知つて
 全 ちふそろくと神風が
 全 大ききものさ小さい氣を
 全 日の出見た所針つけて
 全 筆取給へ照葉見て
 全 てり葉へ時雨添た所
 全 顔ももみよる丈有て
 全 沖見晴してね日の出に
 全 紫娘たらいふの
 全 谷の芥に成葉じやが
 全 直は直丈有る白鶴は
 全 盛り つかしい箸が轉てさへ
 全 逆さまじや 亭主朝起か、朝寐
 全 義を見て勇む 開きや不便など救助にも
 全 陰で若世の慈悲聞て

きの部

さめる相談

曆を出して印日を

全

若且一人にこくと

全

姉の祝を妹中が

全

扇渡して繪馬堂で

全

曆開いて吉日を

極め

棒程に成る箸程が

全

往て見たいナア外國へ

全

凝てけいこを被成だけ

全

附馬つれてしほくと

全

下見てどかくくらさんと

全

捨て置たら寐坊介は

全

かんば狩てもいん賣は

全

水かけてたら両方から

全

あんたの不足いふてたら

全

どふじや一枚はづんたら

全

接醫も祝て冬至には

全

らうそく代じや待賃の

全

かり子待して最一ふく

全

米や孝女の風呂敷へ

きの芽もさかへ
さかへける

全

氣は心

規則たて

祈禱

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

身儘はさ、ん目那でも

笑てくらそか日々

恵む機も身の無事の

慈善するのも我家の

無事が長者で日々に

貧の娘もサトへ出しや

親も胸り官服に

手洗盥へ稼人の

氣か能ひ銅貨吹立の

袂から出た反古から

あふないひよつて着せてから

幼男がお上るち、じやれで

小賣はちよろい思案から

はいると隠すカン徳利

顔見て咄中止とは

いふ丈いふて仕舞んど

初荷運んで新ら蔵へ

勇氣りんく

ゆの部

初賣の聲聞升と

床あめでたふ福壽舞も

東洋西洋の帳分て

松もお家の世につれて

寐ん所へひいく湯の報知

未を思ふて初着にも

お妻も内へ同居して

踊りがはづむドノ村も

足る事知つてくらしてりや

綿帽子さる鬼瓦

温ひケドヒメの肌

違ふてれ禮いふ風呂と

一夜泊りに幼男つれて

やるカイいんだ跡坐敷

取れ升くらい掛衿も

め

電針で字の通じるの

足てさがさにや小便たど

全 夜刃が居るゲナアノ顔に
 メチヤクに 新米仲居作り身を
 めでたいく 地租も納めたマア無事に
 全 所得の札も張よふに
 全 家内揃ふて年忘れ
 全 今年も無事で家内中が
 全 追々廣ふのふれんも
 全 ひいては伺といひ兼て
 全 丸鬘さんに成たうば
 全 身の納りて姉はんも
 全 御道筋も御無難で
 全 嫁は隠して居升ケド
 全 有馬の功能顯はれて
 全 めでたう候ける宵のふく鍋けさ洗て
 全 目がさめて 更て待たした苦も詫て
 全 今朝見事じやヤレ垣に
 全 飯の上の鷲 わたいらお金見ましたら
 全 一寸咄しるツン州には
 全 面倒な 隣出好きで来る人に

女夫して うぶ毛抜屋と理髪業と

みの部

道くで 持たしよるワイツイ猪口を
 見くらべて 袖へ當てる反成りを
 全 みるんさひ よさそふち所焼物の
 全 樽壳にして頭大坊め 徳利も寐たら巳も寐よ
 全 出して禁酒の廣告を 出善に出した金丈は
 全 水くさい 詞斗りて出てる娼は
 全 耳に立 遣出寐苦し時斗やの
 全 迷に迷ひ 一つ家頼む雪のくれ
 全 人を教へる坊主でも 失ふて居る學資金
 全 満る 桂男の能ひ器量
 全 重ねた月もこぼれそに

み之部

短ひな 聞人へ粹かへホ太夫
 見てもらひ 幼男チ清書をお伯さんに
 全 小幼女も舞ふてれ肴に
 籠にさらく艸かりの
 三日月 御蔵に走つしり相庭下つて買置が
 御蔵へずつりく女なにこつて身代も
 見へました 跡へそろく丁らんが
 見へるナア 横町へ除けて氷やも
 老むたぐ 宿坊の門でヤシに逢ひ
 全 うちかり鍵を必込で
 白ひ事 汐くむ鬻も書で見たら
 全 不動の火でも木地なりは
 全 世は春玄やケ下峰の景は
 しらぬ顔 逢ふても若ひ氣をくんで
 全 きびそで殺し岩松め
 全 風俗見やがつて静間め
 全 喜代櫓をおその尾付して
 周旋 頼むといわりや性分
 しつぱりと 旅の咄しもか、として

全 時分もよし 仕出しよる等二人して
 全 皆よふ寐てる間に一寸
 全 寐起へもろて冷たれを
 全 喜代に井戸から上さえて
 全 ぐらと鳴よるはらの虫
 全 謀叛の仕たく番テキか
 全 いらち見よつてランビキを
 全 死神二人朝戻る
 全 持た双ばで虫殺そ
 全 帯目消へぬ門内は
 全 たぎる音のみ茶席には
 全 でばれ弟のお妾なら
 全 あられば窓も打けれど
 全 こ、らはよかる隠居所に
 全 餅箱見せて足場から
 全 辻占賣の來るの待つ
 全 笠附せふと揺もんで
 全 月を算へて質札の
 全 高さがめ書出しの

全 仕まひく
 全 思案顔
 全 思案して
 全 しんきな事
 全 思案して

じん助で ひとつかしい顔仕てるケド
 全 ちよふく出して産代を
 十人並 他で聞く不器量煤人には
 皺のばし ほこり拂ふて瓢介の
 全 折にや赤衿買のんも
 全 丸めた文を物かげで
 全 降日は内湯氣立て
 全 悪作にね辨脊負して
 全 お連れに氣兼いらんので
 思案投首 百計盡て斷りの
 しんきくきひ かんしやく持が蜆汁
 全 茶碗でやるか猪口やめて
 全 きらひわたしが縫ふよふな
 全 廣告見あきステーション所で
 全 親父が車引よるを
 全 女誘ひなこんどから
 全 さんば好でも釣ぬ日は
 全 いらち見よつて蘭挽を
 全 砂糖悪行良水で
 全 自慢して

全 そふドス水は此土地の
 全 びてピツシヤリ木瓜の中子ほり込で
 全 玄かみづら 下戸もかはらん割前で
 全 人に好かれる肝皮
 全 喜代にはねられ番頭めが
 尻輕に 呑む事と言や御自分が
 しほらしい 幹に針有る花じやケド
 全 蚯蚓のよふな字じやけれど
 全 しんどが利 夜明し聲も得聞すに
 全 蜘蛛ばやいとる竹箒

ゑの部

全 ゑんの下のまひわたし斗しまつして
 全 ゑらそふに 商人だてら八ヒケを
 全 此節少々出奈たどて
 全 金でつらはる若旦那
 全 人のちへかり自慢顔
 全 顔でせんたら色事は
 全 知らぬ漢語とつべこべと

全 已れ爪など煎じとは
 葱上るり聞役も
 好虫も有る夢の葉を
 先んの内より履しのに
 鮎が有とはとりくの
 子供もよいが斯ふ有と
 袖も手廻して山番が
 皮切所は仕舞迄
 東京行ものり詰は
 兼るか、衆で口も手も
 茸の喰飽仕よと思や
 青成工合ゴケの方が
 卒業して来て歸朝とは
 詫に戻るも官服で
 古郷へ錦かざるとは
 成たて聞と御隠居の
 國の爲とは志願して
 兄の極侗で有たケド
 氣違ひ水を長じやとは
 得手勝手

畫のよふき
 杖で教へて味から
 手折たいナア梅よりも
 入江にかゝる雪の胎
 けさは鳥も景の足しに
 道の正しい友撰みや
 新聞所々に小賣店
 同じのれんがアチコチに
 色どる炭も風流の
 元は根も葉も無ひ事が
 乳母が持て来た名月に
 到來の柿別荘から
 誘はぬ已も傍杖に
 車やさんも怪我じやケド
 猫はなんにも知らんのに
 ひの部
 ピンくも うつかり寐間をまくつたら
 ひかへて いふて憎まれ升よりは
 全 いひたい事も花嫁は

全 隣法事で晝飯を
 全 酢の一厘も落さずに
 全 必込しめてたまりには
 全 呵つた跡でお廻りが
 全 極好き母者の苦と聞て
 全 いひたい事も慎んで
 全 連られて行肝煎は
 全 ふとんやのば、もふ今に
 全 岩松め夜ばひ蹴飛ばされ
 全 酒やの拂へて見て
 全 律義な人と思てたに
 全 目か覺て見りや内じやなひ
 全 升の隅から一升も
 全 着た渡しに立咄し
 全 素顔て見たら引走つて
 全 剃刀さはりなへ鏡臺の
 全 書出しの日は居たのんに
 全 マアマ仕合せ車やも
 全 そつと産家をのぞいたら

全 大和濕氣日に鱈の直を
 全 きらひアンタか靴音は
 全 中で鍵裂押入の
 全 さよくみんな姉はんの
 全 旦那どこへどちやらくらと
 全 列席か、も宿坊へ
 全 そろりは君の意に叶て
 全 御堂の前も早ふから
 全 義さへ欠ねば狹庭も
 全 丁度爰ら歎琵琶の胴は
 全 めつたにおうば難産は
 全 日の本内裏
 全 廣ひく
 全 もふ御免
 全 持て来た
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全

も の 部

さしきと外とへちるもみち
 頂きました轉るほど
 喜代の里からぼての尻
 ナット摺火ならソラ爰に
 通ひへ平菜チヨト付て
 承知で幼男のばちんも

全 全
 風が隣の菊の香を
 下手な順會本家から
 幼男ヤンおいとよとしてる
 手製このわた出えて見
 底いろて見い德利の
 アノ性根あら譲づても
 ドレ剛を両手出して來
 うばも折く氣を付て
 かきみしられた譯聞と
 お妾我物縫ふ丈を
 番隨一寸やりかけて
 こ、迄道が付てくりや
 五合の酒も一合つ、
 伯父の異見が身に染て
 厭やでんでへ火の中も
 成つて遣る氣じや片うでに
 溝も衛生と長家中が
 聞ば見捨せよそ事も
 お客始て幼女さんが
 もふよかる
 餅ついで
 尤じや
 むて余し
 全 全
 もふ是からは
 全 全
 諸共に
 全 全
 もじくと

全

せ乃部

全
 きびそでおいと押へつ、
 せんこ立 雷と地震と取ちがひ
 せんぐりく のきんも分けて盛大に
 全 買ひ人は切れぬ能ひ仕にせ
 全 飯粒一つ見付たら
 全 参宮賑はし田舎から
 全 陽報と成て陰徳は
 全 世界は進歩發明者が
 全 穴からつづく蟻の隊
 全 ひとりか二〇カ仕出したら
 全 交際殖て各國に
 全 元とは二本の柱から
 全 狩盡しても淫賣は
 全 師匠の情事で連中が
 全 花見に邪な菓子賣が
 全 新聞取らぬ聾先生
 全 せはしきひ
 むふ一月で何もかも

全 全
泥付けやがつた車やめ
ぞ、かみ立る釣臺に
すゝみがてら 販賣め行燈橋詰へ
全 全
エ、商賣じや花火やは
好き
親 借 げ 無 本 買 ぶ
其くせゑらひ下手くそで
全 全
薬喰にも百目ほと

京の部

全 全 全 京
海の無ひのに坊主が多ひ
五大洲響く織物は
菜と小便と早替り
全 全
か、にそりや徳世帯には

版權登録

陰陽軒泉原和合宗匠 撰

明治廿六年五月廿六日印刷
明治廿六年六月廿一日發行

※中々※
※正價十五錢※
※中々※

版權所有

發行者 赤志忠七
大阪市東區本町四丁目卅一番屋敷

印刷者 瀬戸清次郎
大阪市西區駒下通一丁目四十八番屋敷
一成會

- 發兌所 大阪東區本町心齋橋北エ入ル 赤志忠雅堂
- 發兌所 大阪東區瓦町難波橋筋西へ入 赤志支店
- 發兌所 大阪東區船越町骨屋町 竹林久兵衛
- 發兌所 大阪南區日本橋通八幡筋角 博多久吉
- 發兌所 大阪東區南久太郎町井池東へ入 鳥井正之助
- 發兌所 大阪市東區松屋町農人橋南入 伊藤清玉堂

其他全國各地書林新聞雜誌販賣店ニ有之候

新版書籍廣告

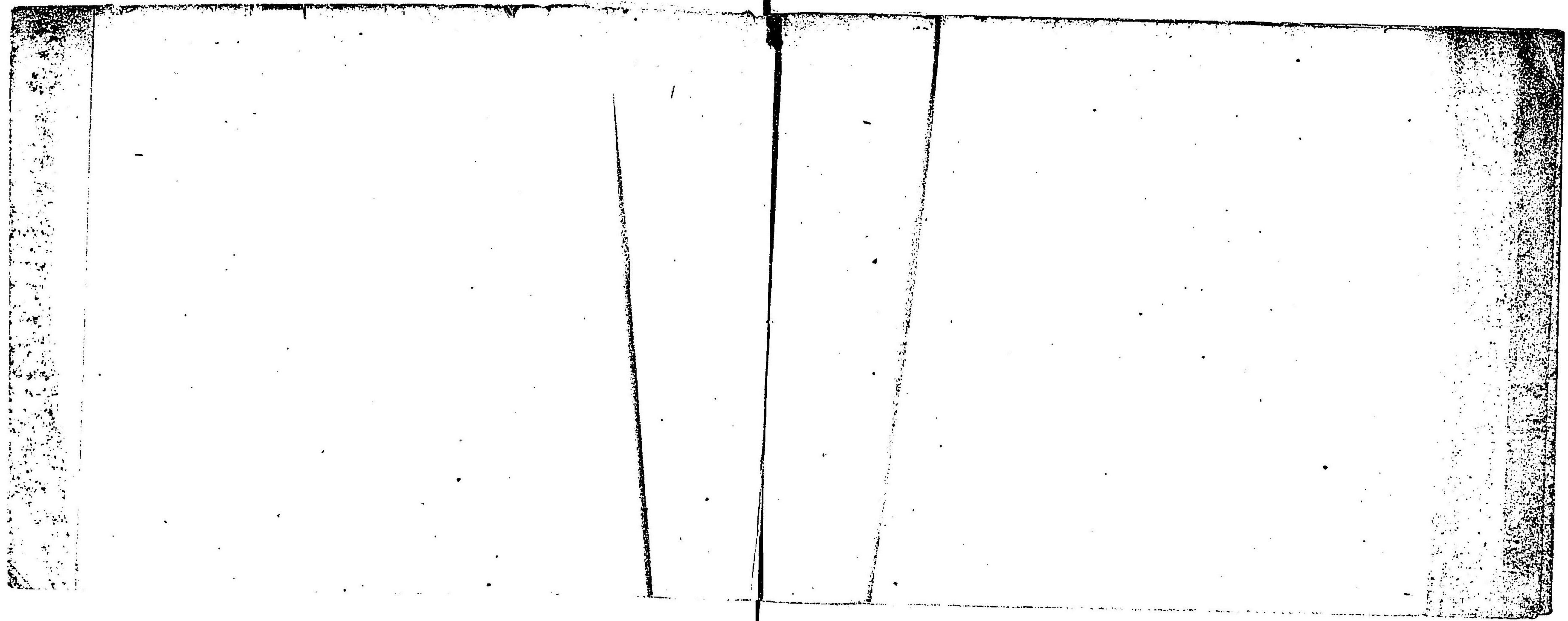
- 生花學乃近道 全二冊 正價廿五錢 郵稅八錢
- 料理素人庖丁 全二冊 正價廿五錢 郵稅八錢
附 手輕西洋料理法
- 置碁大全 全二冊 正價 二五錢 郵稅 二錢
- 粹のふところ 全一冊 正價 二六錢 郵稅 二錢
- 粹の國會 全一冊 正價 二五錢 郵稅 二錢
- 粹の撰擧 全一冊 正價 二五錢 郵稅 二錢
- 粹の總理 全一冊 正價 二五錢 郵稅 二錢
- 滑稽開化土産 全一冊 正價 二五錢 郵稅 二錢
- 日本支那三風料理 全一冊 正價 四十錢 郵稅 四錢

大阪東區本町四丁目卅一番屋敷

發行所 赤志忠七

大阪東區瓦町二丁目六十六番屋敷

發行所 赤志支店





5